発表要旨

「明治初期のディケンズ受容―内田魯庵を中心に」

水野　隆之

ディケンズの本邦初訳は明治 15 年の『西洋夫婦事情』であり、それを皮切りに明治初期には主に短編作品が翻訳されてきた。本発表ではそれらの中から内田魯庵の翻訳を取り上げる。小説家、評論家として活躍した内田魯庵は、英語からの重訳であるがドストエフスキーの『罪と罰』を日本で初めて訳したことで翻訳家としても知られ、ロシア文学のみならず英米文学や仏文学作品を数多く訳している。ディケンズの翻訳も「黒頭巾」と「酔魔」の 2 編がある。またこれに先立って、一説によるとこの「酔魔」の翻案とされる短編小説「酒鬼」を発表している。さらに「チャーレス、ヂッケンス傳」を『女学雑誌』に連載するなど、ディケンズとの関わりも深い。本発表では内田魯庵の業績を振り返るとともに、ディケンズのどこを内田魯庵が評価していたのかを考察する。